

# 令和7年度 第104回 全国高等学校サッカー選手権大会埼玉県大会 総評

報告者：高体連技術部員 南稜高校 横山晃一

## 1 大会概要

2025年10月12日から11月16日のおよそ1か月間をかけて実施された。シード校高校総体予選ベスト8校（昌平高校・西武台高校・浦和南高校・成徳深谷高校・川口市立高校・武南高校・聖望学園高校・浦和学院高校）とSリーグ参加校14校、さらに9月に実施された一次予選突破校26校を加え、計48校によるノックアウト方式のトーナメントで、試合時間は80分、決しない場合は延長20分、その後のPK方式で勝者を決めるルールで行われた。県内各地で計47試合の熱い試合が繰り広げられ、最終的には優勝：昌平高校、準優勝：武南高校、3位：成徳深谷高校、細田学園高校という結果で幕を閉じた。

## 2 決勝戦振り返り

全国でも十分に通用するであろう技術力と攻撃力を持つ両チームであったが、決勝では80分を通して守備強度が光る試合となった。両チームともに決勝に至るまでの試合で失点する試合が多かったが、この試合では中盤でコンパクトな陣形を保ち、激しい寄せとコンタクトでボールホルダーの自由を奪う場面が非常に多く見られた。またその中で生まれた好機も、ゴール前での人数をかけた守備やGKの判断の良い飛び出しや好セーブによってスコアレスの時間帯が続いた。延長に入るかと思われた後半アディショナルタイムに、左サイドハーフライン付近で相手DFを1タッチでかわしたMF⑦長がそのままスピード豊かにペナルティーエリアまで進入し、左足一閃。これが決勝ゴールとなった。

## 3 ベスト4進出チーム分析

### （1）昌平高校

プレミアリーグ EAST 所属の昌平高校はベスト8からの登場で、決勝までの計3試合を戦った。1-4-2-3-1のシステムが基本で、高い技術力をもった選手によるボール保持率の高さが特徴である。相手を押し込んだ状態で試合を進める時間が多いため、得点になった場面は速攻に近い形が多かった。試合状況に応じて2列目3人の配置転換をすることで打開を図ることが多かった。守備面ではGK⑯小野寺のビッグセーブと①土渕のPK戦でのシャットアウトがチームを救った。

### （2）武南高校

1-4-2-3-1のシステムをとり、攻守のバランスが良いチームであった。相手ゴール前での即興性あるコンビネーションが魅力で、相手のプレスが追い付かない場面を多く作り出した。特にトップ下に位置するMF⑩有川は得点に直結するプレーに関わることが多く、相手の脅威となった。また、ショートコーナーなど多彩なセットプレーも得点源となった。

### （3）成徳深谷高校

前線の高さと機動力を生かしたサッカーが特徴。中盤がダイヤ形の1-4-4-2のシステムで、トップは戦術に応じて190cmの長身FW⑩頓宮と機動力のある⑪川上、得点感覚に優れた⑩関根から2人を組み合わせる。早いタイミングで同サイド背後にロングボールを送り、競り合いからチャンスメイクを狙う。その流れから、深い位置で得たロングスローなど、セットプレーも大きな武器としているチームであった。

#### (4) 細田学園

3バックを採用し、中盤より前は相手によって配置を使い分ける。相手のプレスを認知しながらロングボールとビルドアップを使い分け、ビルドアップではWBが幅をとってからハーフレーンへのランニングでチャンスメイクをする機会が多く、ロングボールではFW⑩松本の競り合いからゴール前に迫る。2列目に位置するMF⑪小野寺は切れ味鋭いドリブルで、1人で決定機を生み出すことができる。

### 4 大会の特徴

ラウンド8以上の試合では、所属リーグの序列や対戦成績によって格上と目される相手に対しても、始めから自陣深くにブロックを敷くチームが少なかった。互いにラインを高くする時間が多いため、中盤での人数をかけた連続した守備は見ごたえがあった。

いっぽうで得点シーンは相手がペナルティーエリア付近で守備組織を構築するよりも早くシュートまで持っていく、速攻型が多いのが特徴的であった。そのため、速攻を受け、相手にスペースを与え、カバーリング間に合わない状況下という、相手に優位な状況ではあっても、1対1守備の強さやGKとの連携で処理するなどの賢さがもう少し見たいところではあった。

### 5 おわりに

優勝した昌平高校は総体県予選に続いて2冠を達成した。苦しみながらも逆境を撥ね退けて勝ち上がった雄姿は、多くの人たちに感動を与えてくれた。選手権本戦においても埼玉県代表として存分に躍動し、昌平らしいテクニカルなサッカーを展開してくれることを期待しつつ、結びとしたい。